

三 石 博 行 Van Drom Eddy

フランス語の讓歩表現の文語及び口語ニュアンスの統計的分析
(Analyse Statistique des Nuance
Orale et Écrite des Expressions
Françaises de Concession)

フランス語の讓歩表現の文語的及口語的ニュアンスの統計的分析
Analyse Statistique des Nuances Orale et Écrite des Expressions Françaises de Concession

三石博行 Van Drom Eddy *

1、言語・語彙分析の三つの方法

言語や語彙の分析には、規範分析、意識分析と統計分析三つの方法がある¹。第一番目の規範分析は、辞書に示されている言語や語彙の用例や規範を調査する方法である。第二番目の意識分析は、収集された言語や語彙の実例を分析者の意識を基にして解釈する方法である。第三番目の統計分析は、言語活動の実態調査から得られたデータベースを統計学的な手段を用いて分析する方法である。一般に、規範分析より、意識分析が、また意識分析より、統計分析が、より正確な言語や語彙の分析方法であると評価されている²。

規範分析では、現在殆ど使われていない用法も辞書に記載されているため、辞書に示されていることばの意味や用例が、実際の言語活動に於いて頻繁に使われているとは限らない。従って、規範分析では、現実の言語活動で使用されている用法を、理解することは不可能である。そこで、実際に使われている言語や語彙の実例を集めて、その分析をする必要がある。この分析方法として意識分析が活用される。

しかし、意識分析では、収集された言語や語彙に関する資料を、観測者の意識、言い換えると分析者の言語活動を基にして解釈することになる。研究対象である言語と観察者の言語活動・意識を構成する言語は同次元にある。そのため意識分析は主観的な観測や自己分析と類似する方法を取ることになり、意識化されていない言語世界に関する分析の可能性が断たれることになるため、言語主体の意識のみが意識分析による言語理解の根拠となる。そこで、意識分析はその実証主義的な根拠の希薄さを批判される。

この意識分析では、分析対象である言語活動としての意識が、観測者である言語主体の社会的、文化的、歴史的な要因に制約されているため、言語主体の意識外にある「ことば」、つまり主観的理解の外にある「ことば」に関しては、観測不可能である。意識分析の限界を越えるためには、実証的な研究方法を言語学の中に取り入れる必要がある。現実の言語活動の世界は、意識に現われたり、意識として存在している世界よりも常に広く、主観的判断では完全に捉え切れるものではない。意識分析が実証的分析に較べて評価されない理由は、科学的論拠やその確信問題を自己意識の中に求める主観主義的な傾向があったからであり、伝統的な近代科学の実証的方法論とは相容れないからである。この限界を越えるために、第三番目に挙げた統計的分析が課題になる。

統計分析を行う前に、実態調査を基にして言語や語彙の用例に関する資料収集の作業が必要とされる。現実の言語活動の実態調査から得られた資料は、観測者の主観的や直感的な言語現象に関する理解を越えて、常に新しい現実を示す。実際に、言語活動の現実は、個人的な理解の範囲を越えて存在している。例えば、二つの類似する表現のどちらがより多く使われているかという事実を調べる場合に、一人の観測者の意識分析では、その判断が困難な場合がある。例えば「水がのみたい」と「水をのみたい」の類義表現を比較分析する場合、意識分析では、目的語「水」に対する助詞の「が」と「を」の類義表現の主たる使用法について判断することはできない³。この場合、意識分析の方法は限界を来している。そこで、二つの類義表現の頻度に関する実態調査が必要となる。

しかし、実態調査で得られた資料の列挙や羅列では、科学的分析とは言えない。実態調査の資料は、伝統的な統計学方法に従って解釈することが出来る。実態調査で得られた資料の統計的な処理によって、データの全体的な性質やデータを構成する要素を分析したり、それらの要素間の相関関係を求めたりすることが可能となる。例えば、先に示した助詞の「が」と「を」の類義表現に関する実態調査の場合では、「が」と「を」の項目を持つ助詞を変数と考える事が出来る。助詞の変数は「が」と「を」の二つのカテゴリーを持つことになり、それらの二つのカテゴリーを計量的に尺度化することによって、統計的な測定が可能になる。数値化された測定結果を基にして、その統計学的な解釈が可能になる。つまり、統計的分析をするためには、先ず実態調査の資料を統計的な方法で解釈す

* 阪南大学講師

ることができるように加工しなければならない。

実態調査やその資料の統計的分析は意識的分析では判明できない現実を理解する方法であるが、同時に、莫大なデータベースの作成、つまり莫大な調査時間が必要となる。計量分析を進める労力が、必ずしもその研究目的を十分に充たすために必要な作業であるのかという事を、調査に取り掛かる前に、吟味しておく必要がある。計量化されたデータの有効な活用の目的が明確でない場合には、敢えて、統計的処理をする必要はない。人文系の研究は、一般に個人や小集団の限られた労力での作業になっている。従って、分析対象をより経済的に研究することも、大切な研究活動の戦略である。我々の表現方法の研究でも、実態調査結果の統計処理や言語現象の定量的判断の意味を具体化し且つ明確にしておく必要がある。

2、よく使われている譲渡表現に関する意識分析

我々はフランス語表現を分析するために、文法的解釈と意味論的解釈の二つの側面を分析的に一覧できる表を作った⁴。特に、ここでは、その表を構成している要素を説明し、その中で統計処理可能な要素を検討する。

2-1、文法的意味論的要素分析表の項目

譲歩表現を構成する文は、意味として対立している二つの構文から出来ている。例えば、譲歩表現を持つ構文や句は、その結果である構文からみれば反対の原因や理由の意味を持つことになる。言い換えると、譲歩的原因から導き出される結果は、その原因や理由からは想像も出来ない事態を示すことになる。予期しなかった結果が、譲歩的表現を持つ原因の構文や句から引き出される。

今、譲歩表現文を構成する文を考える。その中で譲歩表現を持つ文や句の文法的場所の項目を前方「A」として、その譲歩的原因に対して予期しなかった結果の表現を示す文や句を持つ後文「B」の二つの要素と、文として構成されているものを「+」とし、そうでないものには「+」の記号を省いた「」として、その二つの要素の組み合せから成り立っている文法的場所の要素を以下の表に纏める。

表1 場所の項目

	譲歩表現を持つ前部分 A	予期しなかった結果の表現の後部分 B
文として構成されているものを(+)	+ A	+ B
文として構成されていないものを()	A	B

次に、譲歩表現を持つ文や句と、予期しなかった結果を示す文や句の二つの位置関係の倒置可能性について議論する。文によっては、譲歩表現を持つ前文や前に位置している句が、予期しなかった結果を示す後文と倒置しても意味が全く変化しない場合と、その結果意味が異なる場合、もしくは、倒置事態が不可能な場合などがある。そこで、譲歩表現を構成する文法的位置の項目について議論する必要がある。ここでは、譲歩を表わす表現の来る位置に関するものは、前文と後文の二つの断定文の位置と、それらが変換可能であるか、そうでないかの可能性に関する要素によって構成されていると分類する。例えば、譲歩を示す表現が前の断定文にあっても後の断定文にあっても関係のない場合、言い換えると、前文と後文を置換してもまったく文章のニュアンスや意味が変化しない場合を「R」とする。また、譲歩表現を持つ文が前の断定文と後の断定文に置換可能であるが、譲歩を表わす表現を前文におくことが好ましい場合を「R1」、逆に、後の断定文に置くことが好ましい場合を「R2」とする。さらに、譲歩表現を持つ文が必ず前の断定文に来なければならない場合を「1」、その逆にの場合で、譲歩表現を持つ文が必ず後文に来る場合を「2」とする。これらの5つのカテゴリーを以下に示す表に分類する。

表2 前文と後文の位置の転移に関する項目

	前文 1 と後文 2	前の断定文 1	後の断定文 2
前文と後文が置換可能(R)	R	R1	R2
前文と後文が置換不可能()		1	2

讓歩表現を構成する文法的時制の項目は、不定詞、直接法と接続法の三のカテゴリーがある。そこで、それらの項目を以下の表に示す。

表3 時制の項目

時制	不定詞	直接法	接続法
----	-----	-----	-----

さらに、讓歩表現を構成する意味論的な解釈から、表現のニュアンスに関する項目は、文語的、口語的と文学的の三つのカテゴリーに分ける事ができるので、それを以下に示す。

表4 ニュアンスの項目

文のニュアンス・口文ニュアンス	文語的	口語的	文学的
-----------------	-----	-----	-----

以上、文法的解釈と意味論的解釈の二つの側面を分析的に一覧できる表を基にして、頻繁に使われている讓渡表現について、接続詞、前置詞や副詞の場所、位置や時制に関する文法的要素と、文語的、口語的や文学的表現など意味やニュアンスを構成している要素の、文法と意味論の二つの側面からの分析を行う。それらの讓渡を示す接続詞、前置詞と副詞の表現に関して以上に示した項目に関して、実例を集め、それらの表現方法に関する分析を意識分析を基に行った。

2-2. 良く使われる讓渡を示す接続詞

良く使われる讓歩を示す接続詞 *quoique*、 *bien que* と *malgré que* に関する意識分析の例を以下に示す。

表5、良く使われる讓渡を示す接続詞の用法

n	表 現	場所	時制	位置	口文	ニュアンス	注意事項
1	<i>quoique</i> それにも関わらず	+ A	接続法	R	-		前文Aと後文Bで同じ主語の場合、表現方法+(名詞/形容詞)
2	<i>bien que</i> ・・だけど	+ A	接続法	R	文語>口語 E>O	ちょっとした驚き、3の表現より上品	
3	<i>malgré que</i> ・・がそれでも	+ A	接続法	R	口語>文語 O>E	困惑、無視、不承	

讓歩表現は、ことの成り行きや結果から考えると対立する筈の原因「A」と、その原因から考えると予期しなかった結果「B」の二つの断定文によって作られている。しかもその二つの断定文の間に論理的関係がない表現をいう。言い換えると、その対立する筈の原因「A」は非現実的であるために、その結果文「B」が期待できそうもないことを示す表現方法である。

ここで、定義されている記号を再度説明する。「R」とは、 Reratif の略号で、前文と後文が相互にそれぞれ置換できることを意味する。二つの断定文の位置が変化しても意味やニュアンスはまったく変化しない場合の関係として定義されている。従って、よく使われている接続詞を用いる讓渡的表現の、 *quoique*、 *bien que* と *malgré que* の表現では、前文と後文が相互置換可能である。また、讓歩表現がA、つまり対立する筈の原因の表現が文章として成立している場合を「+A」と定義して、「+A」と「R」とが同時に成立していると言うことは、対立する筈の原因を含む文と予期しなかった結果を示す文が前後相互に置換することができる場合を示している。

例えば、

1. *Quoique la température soit élevée, la réaction chimique n'a pas lieu.*

(温度が上昇したのだが、科学反応は生じなかった。)

2. *La réaction chimique n'a pas lieu quoique la température soit élevée.*

(温度が上昇したにも関わらず、科学反応は生じなかった。)

さらに「口文」で、それらの讓歩の表現方法が文語的ニュアンスか、それとも口語的ニュアンスかの度合を示す。

意識分析では、*quoique* は文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの分類が明確につけられなかった。しかし、*bien que* は文語的ニュアンスが口語的ニュアンスより強いと判断した。さらに *malgré que* の表現では口語的ニュアンスが文語的ニュアンスよりも強いと判断した。

2-3、良く使われる譲渡を示す前置詞

よく使われている譲渡を示す前置詞の用法は、*en dépit de* (名詞)、*malgré* (名詞)、*quitte à* (不定詞) 等がある。これらの表現に関して分類した表を以下に示す。

表6、良く使われる譲渡を示す前置詞の用法

n	表現	場所	時制	位置	口文	ニュアンス	注意事項
1	<i>en dépit de</i> (n)	A	—	R	文語>口語	執拗、強引	
2	<i>malgré</i> (n)	A	—	R	文語>口語	矛盾の	
3	<i>quitte à</i>	A	不定詞	R 2	口語>文語	危険性のある	

ここで、定義されている記号を再度説明する。「R2」とは、後文に譲歩を示す前置詞が位置し、それは前文に置き替えるのはあまり好まない。譲歩の表現は、結果文である後文に譲歩のニュアンスを示す接続詞(句)、前置詞(句)、副詞が来ることが好ましい。例えば、以下の例文に示すように、もしその位置関係が変わった場合の意味は同じではない。

3. Jean n'est pas encore là ... ? Encore qu'il soit trop tôt pour s'inquiéter ... (O)

(彼はまだここに居ないのではないか。まあしかし、そのこと(彼がここに居ないこと)を心配するのはまだ早いと思う。)

しかし、この3の文章を4に替えると不自然な感じになる。

4. Encore qu'il soit trop tôt pour s'inquiéter, Jean n'est pas encore là ... (?)

(不自然な表現)

このように前文と後文が置き変るのを好まない表現をR2と定義した。

さて、良く使われる前置詞の用法には、*en dépit de* (名詞) と *malgré* (名詞) の表現が、前文は断定文の形式を取らないため、対立する筈の原因「A」として定義され、かつ前文と後文は置き変っても意味やニュアンスはまったく変化しないため、「R」と定義されている。また、*quitte à* (不定詞) のように、前文は断定文の形式を取らないため、「A」として定義されるが、前文と後文が置き変わると意味やニュアンスに変化が生じてしまい、このような後文に譲歩表現を置くことは好まない場合を「R2」と定義した。「3」の例文は、その具体的な例である。

さらに、譲歩の表現方法が文語的ニュアンスかそれとも口語的ニュアンスかの度合を示す「口文」については、*en dépit de* (名詞) と *malgré* (名詞) の表現は文語的ニュアンスが口語的ニュアンスより強いと判断した。また *quitte à* (不定詞) の表現では口語的ニュアンスが文語的ニュアンスよりも強いと判断した。それらの例文を以下に示す。

5. En dépit des risques d'explosion, la NASA lançait la navette spatiale.

(爆発の危険性があるにも関わらず、NASAはシャトルを打ち上げた。)

6. Malgré les coupes budgétaires, ces astronomes poursuivent leurs recherches.

(予算の削減にも関わらず、それらの天文学者達は彼等の研究を続けている。)

7. Quitte à y passer toute la nuit, on reprend les calculs.

(徹夜のおそれがあるかも知れないが、計算をし直そう。)

2-4、良く使われている譲渡を示す副詞の用法

よく使われている譲渡を示す副詞の用法は、*cependant*、*néanmoins*、*pourtant* と *mais* 等がある。これらの表現に関して分類した表を以下に示す。

表7、良く使われている譲渡を示す副詞の用法

n	表 現	場所	時制	位置	口 文	ニ ュ ア ン ス	注 意 事 項
1	<i>cependant</i> (前文…であるがしかし、後文)	in B	—	2	文語>口語	時を示すかもしくは単純な同格のニュアンスを含む	
2	<i>néanmoins</i> (前文…であるがそれでも、後文)	in B	—	2	文語>口語	訂正ニュアンスを含む。	必ず文頭に来る
3	<i>pourtant</i> (前文…)なのだが、しかし	in B +A	—	2 2	口語>文語	不十分 ちょっとした驚き。	
4	<i>mais...</i> (前文…)だが、しかし	+B	直接法	2	—		非常に一般的な型

ここで使われている「in B」とは、予期せぬ結果文の中に譲渡を示す副詞が使われていることを示す。また「+B」とは予期せぬ結果を示す副詞が文の後に続く場合であり、「2」とは譲歩の表現を持つ文が絶対的に後文に位置する場合を示すものである。

さらに、*cependant*と*néanmoins*の「口文」の度合では文語的ニュアンスが口語的ニュアンスより強いと判断したが、*pourtant*は口語的ニュアンスが文語的ニュアンスよりも強いと、意識分析では判断する。しかし、*mais*に関しては、文語的ニュアンスかそれとも口語的ニュアンスかの度合の判断は明確に出来なかった。それらの例文を以下に示す。

8. Les trous noirs sont invisibles. Cependant, ils sont détectables indirectement.
(すべてのブラックホールは観察できない。しかし、それらは間接的に探知できる。)
9. La masse du pendule a été doublée. Sa fréquence ne change néanmoins pas.
(振り子の重さが二倍になっても、その振動は変化しない。)
10. La dictature au Zaïre est enfin tombée. Il reste néanmoins encore beaucoup de problèmes à résoudre.
(ザイールの独裁政府はついに倒れた。それにもかかわらず解決すべき問題はまだいっぱい残っている。)
11. Beaucoup d'articles ont été écrit sur le sujet. Aucun, pourtant, n'est intéressant.
(その課題について沢山の論文が書かれたが、それらは全く興味深くない。)
12. Les données sont imprécises mais (elles sont) statistiquement concluantes.
(それらの観測結果は一つ一つ不明確ではあるがそれらは統計的に結論を導くことが出来る。)
13. Les deux équipes sont sur le terrain mais elles ne sont pas encore prêtes.
(二つのチームは会場にいるのだが試合の開始はまだだ。)

3、譲歩を示す表現の口語的及文語的ニュアンスに関する事例分析・意識分析の問題点

我々が進めているフランス語表現方法の研究は規範分析と意識分析に基づいている。例えば、接続詞 *bien que* の用法について、辞書によつては、*bien que* の口語と文語的用法のそれぞれの例が示されているので、それを参

考にすることができる。しかし、実際の言語活動の中では、この表現が、より口語的かより文語的に使用されるのかを判断する情報を、辞書を参考にした規範分析で見付け出すことは難しい。そのため、実際の実例を集め、その用法に関する意識分析を行う必要がある。また、表現のニュアンスを、口語的、文語的、文学的と三つに分類したが、実際の分析では文語的表現と文学的表現の境を決めるることは非常に困難であるため、ここでは、分類の基準を文語的表現と口語的表現の二つに絞ることにした。

意識分析では、先ず、表現の事例を集める作業とそれらの事例を口語的用法と文語的用法に分類する作業との、二つの段階がある。この作業を通して得られた資料から、よく使われている讓歩表現の文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの分析を行い、その結果を以下の表に纏めてみる。ここで、「E」を文語的用法、「O」を口語的用法として、それらの口語的表現と文語的表現の使用頻度の関係を不等式で示す。

表8、よく使われている讓歩表現の、文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの傾向

n	表 現	意識分析による口語と文語ニュアンスの程度
a-1	quoique	— 不明
a-2	bien que	E>O: 文語>口語
a-3	malgré que	O>E: 口語>文語
b-1	en dépit de (n)	E>O: 文語>口語
b-2	malgré (n)	E>O: 文語>口語
b-3	quitte à (infi)	O>E: 口語>文語
c-1	cependant	E>O: 文語>口語
c-2	néanmoins	E>O: 文語>口語
c-3	pourtant	O>E: 口語>文語
c-4	mais...	— 不明

例えば、讓歩を示す接続詞bien queの用法に関しては、口語的用法よりも文語的用法に多く使われていると判断したので、E>O、言い換えると 文語>口語として示した。しかし、ここで示された「口語的用法よりも文語的用法に多く使われている」ということは、讓歩を示す接続詞bien que が口語的よりも文語的により多く使われることを単に述べているのであって、決して口語的な使われ方はされないといっている訳ではないし、またその二つの使用頻度の差を厳密に示したものでもない。

この意識分析の結論も、讓歩を示す接続詞bien que に関する調査を行った人の言語活動を基にするので、分析者の言語経験から、「口語的用法よりも文語的用法に多く使われている」という個人的で主観的な結論が下されることになる。

つまり、意識分析で行われた讓歩表現を示す接続詞bien que の事例収集は、無作為標本によって作られたものではなく、我々の主観的意図をもって集められたものである。そのため、この「E>O」の不等式には計量的な意味ではなく、単に経験的な意味として示されている。

逆に注意しなければならない事として、意識分析の方法では、より多く使われている事例を敢えてサンプリングしない傾向がある。「非常に稀な使い方」が興味の対象となるため、例外的な用法例がより多くサンプリングされる傾向が生じる。その上で特別な用法を探し出そうとする意図が働いている。その結果、特に興味を引く例外的な用法例が多く集まる。意識分析から得られた事例件数を基にして、現実の言語活動の計量的な実態を定性的に理解することが出来るとは思われない。

言い換えると、意識分析では、はじめから讓歩の接続詞bien que は、口語的でなく文語的により多く使われているという経験的な解釈が前提にされ、その前提が事例採集の過程に紛れ込んでくるため、意図的な収集が無自覚になされることになる。その結果得られた事例件数を、そのまま現実の言語活動での頻度と考えることはできないし、また計量尺度の材料として利用することも出来ない。その意味で、意識分析を基にして収録した例文資料やデータベースを統計処理することは困難である。

4、讓歩表現の口語的及び文語的ニュアンスに関する実態調査

意識分析が根拠としている観察者の意図的な事例の選択の仕方や主観的な解釈のやり方を否定して、よく使われている讓歩表現の文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの傾向に関する比較分析を進めるためには、実証的な調査方法を導入する必要がある。実態調査は実証的方法の最も初步的な手段である。

統計処理を前提にした実態調査でのサンプリングの方法について述べる。実態調査の対象はランダムに選ぶ必要がある。無作為に集められた標本を基にして、表8に示した「よく使われている讓歩表現」に関して調査する。調査の具体的な方法は、表8に示したそれぞれの表現を、先ず文語的表現を集めたデータベースの中で使われている回数を出す。さらに同様に、それらの表現が口語的表現を集めたデータベースの中で使われている回数を出す。文語的表現のデータベースと口語的表現のデータベースから、それぞれに検索された件数を比較することによって、文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの強度の実態を数量的に判断することができる。

例えば、我々は、口語的表現として、1996年から1997年に掛けて France-Inter、France-Culture と RTBF (Radio Télévision Belge Francophone) から、以下で示すテーマで放送された27の番組を選び、それらの番組をテープから掘り起こして、口語的表現のデータベースを作った⁵。

Emissions radiophoniques sur France-Inter, France-Culture, RTBF; 1996, 1997:

1. L'olympisme belge.
2. Deux lois de la démographie - Définitions de la démographie
3. Salvatore Dali - Les débuts et les œuvres
4. Ethique et nouvelles technologies
5. La situation sociale des drogués en Europe
6. La surpopulation dans le monde
7. Les maladies infectieuses dans le monde
8. Le vieillissement dans le monde
9. Le parasitisme
10. Les enfants au travail
11. Japon et Corée: les frères ennemis
12. Les femmes du Sud et du Nord
13. L'idée de matière
14. Le monde marin aux Açores
15. L'Asie
16. La dette mondiale
17. De l'univers à l'être
18. Les différends commerciaux entre la Chine et les Etats-Unis
19. Les enseignants dans le monde
20. La survie de la langue française et l'INTERNET
21. Les scorpions
22. La pollution de l'air
23. Le mongolisme
24. Les porcs
25. Les plantes et la génétique
26. L'enseignement en France
27. Le vieillissement

また、文語的表現として1998年と1999年のインターネットに記載された *Le Monde diplomatique* の記事を27選

んだ⁵。よく使われている讓歩表現の文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの傾向に関する比較分析を進めるためには、文語的表現と口語的表現のデータベースで使われている表現が出来る限り共通していることが望ましい。そのため、*Le Monde diplomatique* の 27 の記事のテーマの半分は、上記した口語的表現の為に選んだ 27 のテーマと同じものを選ぶ。以下、27 の記事のタイトルを示す。

Articles du *Monde diplomatique*; 1998, 1999:

1. Décervelage à l'américaine
2. Au Japon, une jeunesse ultraviolette
3. Du mauvais usage littéraire de la science
4. Les savants fous de l'agroalimentaire
5. Les riches, terra incognita des statistiques
6. Sexisme ordinaire au travail
7. Résistances américaines aux nouvelles technologies
8. Mondialisation accélérée de la science
9. La toxicomanie domestiquée
10. Le paludisme, ce fléau si peu combattu
11. Enfances fracassées
12. La marche des enfants rebelles
13. De la domination masculine
14. Sortir du cycle infernal de la dette
15. Mais exportez donc! dit le FMI
16. Le commerce mondial, otage de la Chine?
17. L'école, grand marché du XXIe s.
18. L'école publique à l'enca
19. INTERNET et les ambassadeurs de la communication
20. Faut-il avoir peur des aliments transgéniques?
21. Quand l'Union européenne s'entoure d'un cordon sanitaire
22. L'obsession de la santé parfaite
23. Impact social de la crise asiatique
24. Des villes asphyxiées par l'automobile
25. Quand Bruxelles et Paris révolutionnaient l'art
26. La grande mystification des fonds de pension
27. En toute impunité humanitaire

以上のデータベースを、インターネット上で提供されている言語分析のためのフリーソフト「CONC」を活用して⁷、分析した。また、実証性を確立するために、検索データの再現性を点検するために、検索されたデータは別の文書に複写して、再点検を行う。また、例えば *mais* のように、文の始めにくる *mais* の表現は単純な対立を示す表現に使われていることが明確な場合は、それらを検索の段階で外す。

二つのデータベースの検索件数の結果から、選択された表現が、一方のデータベースであるラジオ番組の中により多く使われていれば、口語的ニュアンスの強度が強い表現と解釈できる。その反対に、他方のデータベースである新聞記事の中により多く使われているなら、それは文語的ニュアンスの強度が強い表現と解釈する事ができる。

フランス語の譲歩表現の文語的及口語的ニュアンスの統計的分析

さて、それらの検索結果を以下の表9に示す。

表9、実態調査の結果と意識分析との比較

n	表現	ラジオでの件数	新聞での件数	実態調査の結果	意識分析の口文ニュアンス	意識分析の点検
a-1	quoique	0	0	-	不明	?
a-2	bien que	8	9	E > O	文語 > 口語	○
a-3	malgré que	0	0	-	口語 > 文語	?
b-1	en dépit de (n)	1	8	E > O	文語 > 口語	○
b-2	malgré (n)	10	16	E > O	文語 > 口語	○
b-3	quitte à (infi)	0	0	-	口語 > 文語	?
c-1	cependant	2	28	E > O	文語 > 口語	○
c-2	néanmoins	3	6	E > O	文語 > 口語	○
c-3	pourtant	8	33	E > O	口語 > 文語	×
c-4	mais...	237	152	O > E	不明	×

表9に示した「意識分析の結果分類されたよく使われている譲歩を示す用語」の実態調査の結果から、表8で示した用語の意識分析と実態調査の結果を比較することができる。また、表9で示した、意識分析の点検の項目で使用している記号「?」は意識分析の結果を点検することが困難であるという意味で、さらに「×」は明らかに意識分析の結果と実態調査の結果がくい違ったものに、最後に「○」は、意識分析の結果と実態調査の結果が同じものを意味する。

検索結果から、意識分析が正しいと解釈されたものは10件の中の5件で、明らかに間違ないと判断されたものは2件で、不明なものは3件である。この結果から、意識分析による「よく使われている譲歩表現の文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの傾向」に関する解釈の信頼度は単純に計算しても50パーセントである。

さらに、表8の用語は、「よく使われている譲歩表現」という前提があったが、表9に示す結果から、quoique、malgré queとquitte àは検索されなかった。文語的ニュアンスのフランス語の資料は、159pの約487,000文字によって、また口語的ニュアンスのフランス語の資料は154pで、約480,000文字によって構成されているので、「よく使われている譲歩表現」を見つけるには十分な資料であると断定は出来ない。さらに、en dépit deとnéanmoinsは口語表現と文語表現を含めて検索総数が10件以内であり、その検索総数から譲歩表現の文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの傾向に関する解釈が正確に出来るのか疑問である。中でも、bien queは検索総数が17で、しかも文語的ニュアンスが9で口語的ニュアンスが8件であるため、ここでも譲歩表現の文語的ニュアンスと口語的ニュアンスの傾向に関する解釈が正確に出来るのかは疑問と言える。

この実態調査から、現在のフランス語の譲歩の表現である、maisは口語的ニュアンスを持つと考えられ、またmalgré、cependantとpourtantは文語的ニュアンスを持つと理解される。以下、簡単に、表10に「よく使われている譲歩を示す用語」の実態調査の結果を纏める。

表10、実態調査結果からの譲渡を示す用語の評価

n	表現	用語の使用	ニュアンス
a-1	quoique	全く使用されていないか、その頻度が少ないか	不明
a-2	bien que	使用されている	口語ニュアンスが47.06%で文語ニュアンスが52.94%
a-3	malgré que	全く使用されていないか、その頻度が少ないか	不明
b-1	en dépit de (n)	使用されている	口語ニュアンスが11.11%で文語ニュアンスが88.89%
b-2	malgré (n)	使用されている	口語ニュアンスが38.46%で文語ニュアンスが61.54%
b-3	quitte à (infi)	全く使用されていないか、その頻度が少ないか	不明
c-1	cependant	使用されている	口語ニュアンスが6.67%で文語ニュアンスが93.33%
c-2	néanmoins	使用されている	口語ニュアンスが33.33%で文語ニュアンスが66.67%
c-3	pourtant	使用されている	口語ニュアンスが19.51%で文語ニュアンスが80.49%
c-4	mais...	頻繁に使用されている	口語ニュアンスが60.98%で文語ニュアンスが39.07%

10表から、「*bien que*」の検索件数は合計して17件で、その中で口語的用法として現われた件数は全体の47.06%で、また文語的用法として現われた件数は全体の52.94%であった。また、「*en dépit de (n)*」の検索件数は9件で、その中の口語的用法は11.11%で、また文語的用法は88.89%で、「*malgré (n)*」の26件の検索データ全体の中で、口語的用法は38.46%で、また文語的用法は61.54%であった。さらに、30件の検索データを示した「*cependant*」は、口語的用法として現われたもの6.67%で、また文語的用法として現われたもの93.33%で、9件の検索データを示した「*néanmoins*」は、口語ニュアンスが33.33%で文語ニュアンス66.67%であった。そして、「*pourtant*」は41件検索された中で、口語的用法は19.51%で、また文語的用法は80.49%であった。最後に、389件検索された「*mais*」の口語的用法は60.93%で、また文語的用法は39.07%であった。

検索総数から考えると、「*néanmoins*」と「*en dépit de (n)*」は9件であり、それらの検索件数から、それらの用法の口語ニュアンスと文語ニュアンスを判断することが出来るかは不明である。また、「*bien que*」の検索件数も17件であり、しかも、その口語ニュアンスが47.06%でまたその文語ニュアンス52.94%となると、このデータ数を基に口語的用法か文語的用法に関して判断できるとは言い難い。しかし、「*malgré (n)*」の口語的用法は26件であり、その口語ニュアンスが38.46%でまたその文語ニュアンスが61.54%であるとすれば、そのデータから明確に口文のニュアンスを判断することは出来ないとしても、その可能性は言える。

このように、ここではデータ数と、口語ニュアンスと文語ニュアンスの割合が、それらのデータの口文のニュアンスの判断に大きな影響を与えていることが分かる。しかし、これまでの議論では、譲歩用法の口語ニュアンスと文語ニュアンスとの片寄りに関する判断の基準を明確に示すことは出来ない。

5、文語体及び口語体表現に関する質的変動指數値分析

5-1、分析目的に適応した統計的処理方法の確立

実態調査からは、データの信頼性の問題を前提にして、口文のニュアンスの定量的判断を下すことは出来ない。従って、実態調査から得られた検索件数の数値があったとしても、「*bien que*」と「*mais...*」は、口語的ニュアンスを持つケースが多く、「*malgré*」、「*cependant*」と「*pourtant*」は文語的ニュアンスを持つケースが多い」という解釈に留まることになる。つまり、検索件数のその正確な統計的解釈の方法を知らない限り、実態調査の結果も、意識分析と同じように、「譲歩を表わす用語の口語的及び文語的ニュアンスの傾向を示す」評価の段階で終わる。

しかし、その実態調査から得られた数値を使った統計解釈を展開する為には、統計学的分析の意味を理解しなければならない。実態調査の資料は現実の言語活動の実態そのものを示している。それを更に複雑な統計処理をして導き出す数値の意味を明らかにしなければならないし、その明確な目的が明確に示される必要がある。

口語的表現と文語的表現の使用頻度の比較をするためには、幾つかの統計分析処理の可能性がある。例えばパーセンタイル、百分位数の概念も活用できる。また、多様性指数や質的変動指數の概念を使うことも出来る。

しかし、パーセンタイルは、一般に、分布において観測値の中にある百分率がその値以下であるような、反応カテゴリーや値のことである。そのため、ここでは、累積パーセントが50%を持つ階級値を示す方法として中央値が用いられる。この場合、累積パーセントが仮に75%であるような階級値を求めることによって、分布の片寄りを調べる事が出来る。しかし、この場合には、少なくとも口文ニュアンスの変数を5つのカテゴリーに分けなければならない。我々は、Ed. BEACH (Ed-Beach@sil.org) の作成した検索ソフトを使って、予め用意してある文語表現の文書と口語表現の文書の検索を行ったため、二つのカテゴリーのデータしか得ることが出来なかった。そこで、この分析方法は我々のデータ分析には適さない。

さらに、多様性指数を使った分析を考える。この分析は度数分布の歪みを調べるために用いる方法であるが、離散変数の変動を表わす測度の仕方で、母集団からランダムに抽出した2つの測定値が、異なるカテゴリーに属する確率を示すものである。つまり、譲歩を示す接続詞「*bien que*」の用法をランダムに二つとると、その二つが文語的使用と口語的使用の異なる用法をとる確率を示している。確率が0になれば、殆どその確率はないと言うことであるから、譲歩を示す接続詞「*bien que*」の用法は、文語的使用か口語的使用かの二つの中の一つの用法にのみ使われていることになる。また、もし確率が0.5であれば、譲歩を示す接続詞「*bien que*」の用法は、文語的使用と口語的

使用の二つの用法にそれぞれ同じ割合で使われていることになる。

しかし、ここでも我々のデータ作成の在り方が問題になる。つまり、文語表現の文書と口語表現の文書の検索で二つのカテゴリーのデータがある。この二つの階級の多様性指数は意味を為さない。そこで、この分布を更に一般化するための値を求めることが出来る質的変動指数を用いる。これは多様性指数をカテゴリーの数で割ることで一般的な度数分布の歪みを調べるために用いることが出来る。ここでも概念は、多様性指数と同じであり、つまり離散変数の変動を表わす測度法で、母集団からランダムに抽出した2つの測定値が異なるカテゴリーに属する確率を示すものであるが、確率が0になれば殆どその確率はないが、しかし確率が1になれば二つの分布は同じ50パーセントであると言える。

5-2、質的変動指數値の分析

さて、分布つまり2つのカテゴリーのどのカテゴリーに事例が集中しているかを調べるために、質的変動指數、Index of qualitative variation (IQV) を用いて分析を試みる。

既に、述べたように、多様性指數とは、母集団からランダムに抽出した二つの観測値が、異なるカテゴリーに属している確率をしめすもので、多様性指數Dと定義すると、多様性指數は以下のように示される。

$$D = 1 - \sum_{i=1}^k p_i^2 \quad (1)$$

p_i = i番目のカテゴリーに含まれるケースの比率

この多様性指數Dが取りうる最小値はゼロである。多様性指數Dがゼロになるのは、母集団の全てのケースが一つのカテゴリーに属する場合である。また、多様性指數の最大値は0.5であるが、多様性指數0.5とは、母集団に含まれるケースが、その変数のK個のカテゴリーすべてに均等に分布している場合である。このように多様性指數値によって、データの分布が、あるカテゴリーに極在化しているか、それとも均等化しているかの度合を調べることが出来る。

また、この多様性指數を標準化する測度として、一般に使われている質的変動指數の概念を使う。この測度は多様性指數と非常に類似しているが、最大値が1である点が多様性指數と異なっている。最大値1をとるものは、変数のk個、つまりここでは2個であるが、のカテゴリーすべてにケースが均等に分布している場合、つまりすべてのカテゴリーに含まれるケースの比率が1/Kに等しい場合に限られる。一方、質的変動指數の最小値は多様性指數と同じくゼロで、そうなるのは1つのカテゴリーに全てのケースが集中した場合である。

多様性指數を使って、質的変動指數を以下に示す。

$$IQV = \frac{\left(1 - \sum_{i=1}^k p_i^2\right)}{(k-1)/k} \quad (2)$$

kはカテゴリーの数であるので、ここでは2となる。

表9から、「口語的文書に使われていた、文語的文書に使われていた」の二つのカテゴリーがそれぞれに示した値から、それぞれの用語での「口語的文書に使われていた」場合と「文語的文書に使われていた」場合での、二つのケースに関する質的変動指數値を求める。

表11、口語的ニュアンス及び文語的ニュアンスに関する質的変動指數値

n	表現	Oの件数	Eの件数	検索合計	D=1-Σp _i ²	質的変動指數・IQV
1	néanmoins	3 (33.33%)	6 (66.67%)	9	0.444	0.889
2	en dépit de	1 (11.11%)	8 (88.89%)	9	0.198	0.395
3	bien que	8 (47.06%)	9 (52.94%)	17	0.489	0.998
4	malgré (n)	10 (38.46%)	16 (61.54%)	26	0.473	0.947
5	cependant	2 (6.67%)	28 (93.33%)	30	0.124	0.249
6	pourtant	8 (19.51%)	33 (80.49%)	41	0.314	0.628
7	mais...	237 (60.93%)	152 (39.07%)	389	0.476	0.953

質的変動指数は、度数分布の歪みを調べるために用いる方法である。母集団からランダムに抽出した2つの測定値が、異なるカテゴリーに属する確率を示すものであるから、譲歩を示す用法の口語的表現と文語的表現のカテゴリーの分布に関する考察を可能にする。つまり、ランダムに取られた二つの用例がしめす質的変動指数値から、その値が0になれば、殆ど2つの異なるケースを取る確率はないため、サンプルの譲歩を示す用法は、文語的使用か口語的使用かの二つの中の一つの用法にのみ使われていることになる。また、もし値が1に近づけば近づくほど、譲歩の用法は、文語的使用と口語的使用の二つの用法にそれぞれ同じ割合で使われていることになる。

さて、11表は検索件数順に用法を並べた。この場合、例えば「néanmoins」と「en dépit de」は検索件数が9件で同じ数である。しかし、それらの質的変動指数値は「néanmoins」が0.889で、「en dépit de」が0.395であるため、検索件数が少ない場合や同じ場合には、質的変動指数が大きいほど、その信頼性は益々低くなり、この場合、「néanmoins」の検索結果は「en dépit de」の検索結果より信頼性が落ちることになる。

また、「bien que」は検索結果は17件であるが、質的変動指数が0.998であり、口語的表現と文語的表現の分布は殆ど同じことになるため、17の検索件数では信頼出来ると評価することは出来ない。しかし、「cependant」は検索件数が28である。その数が極めて多いとは言い難いが、質的変動指数が0.249を示し、明らかに口語的表現と文語的表現の分布に差があることが示され、この場合は文語的表現に分布が片寄っているので、仮に28の検索件数でも文語的表現への片寄りの傾向を示しているという結果は信頼出来ると見える。

また、「mais」は質的変動指数が0.953を示すが、検索件数が389件もあるので、文語的表現より口語的表現により多く使われているという結論は信頼性が高いと言える。

以上の議論から、検索件数の要素を抜きに質的変動指数を基にした分析から、譲歩の用法の文語的表現と口語的表現のニュアンスの比較をすることは困難であることに気付く。

5-3、質的変動指数の評価基準に関する分析とその信頼性の分析

以上の議論から、検索件数と質的変動指数との関係から、口語的表現と文語的表現のニュアンスに関する評価分析は、その信憑性や信頼性を巡る議論が問題になる。そこで、質的変動指数と検索件数の関係の二つのデータから、口語的表現と文語的表現のニュアンスに関する評価を決定するための関連性を見付け出す必要がある。そこで、表11から、IQV値順にデータを整理し、口語的及び文語的表現ニュアンス分析の信頼性評価を行ってみる。

この表12から、IQV値の低い表現を比較すると、5の「cependant」が0.249で最も低く、その次は2の「en dépit de」が0.395を示す。この二つがIQV値が0.5以下を示し、明らかに口語的表現と文語的表現のニュアンスに関する片寄り分布が認められる。しかし、この二つの中で、「cependant」の検索総数は30であり「en dépit de」の検索総数は9であるので、IQV値が0.249の「cependant」がIQV値が0.395の「en dépit de」よりその表現のニュアンスの片寄り分布の信頼性が高いと言える。

また、ここで約480,000文字からなる口語体表現のデータベースと約487,000文字からなる文語体表現のデータベース、つまり、約10,000,000文字弱のデータから得られた検索合計数に関して基準を設ける必要があるが、その基準を設けることは非常に困難である。ここで20件数を、質的変動示数值から口語的表現と文語的表現のニュアンスに関する評価分析の信頼性を語る上での最低限の値と仮定する。この考え方から、「en dépit de」はデータ数が9であるため、IQV値から十分に信頼出来る値であるが、しかしIQV値を基にして分析できる信頼性の最低限を充たしていないため、この「en dépit de」の検索結果の信頼性はあるかはまだ明確でないと言える。

以上のように、質的変動示数值から口語的表現と文語的表現のニュアンスに関する評価分析の信頼性を仮定する場合には、検索件数の合計が20以上であることと、さらに、質的変動示数值が0.5以下であることが条件となる。従って、検索件数が41の「pourtant」はIQV値が0.628であるため、「en dépit de」と同様に信頼性は弱いと考えられる。

また、「néanmoins」は検索件数が9でありIQV値が0.889であるため、分析結果の信頼性は無いと考えられる。同様に、「bien que」も検索件数が17でIQV値も0.998であるため分析結果の信頼性は無いと言える。また、検索件数26でIQV値も0.947の「malgré」も信頼性を認められないと解釈出来る。

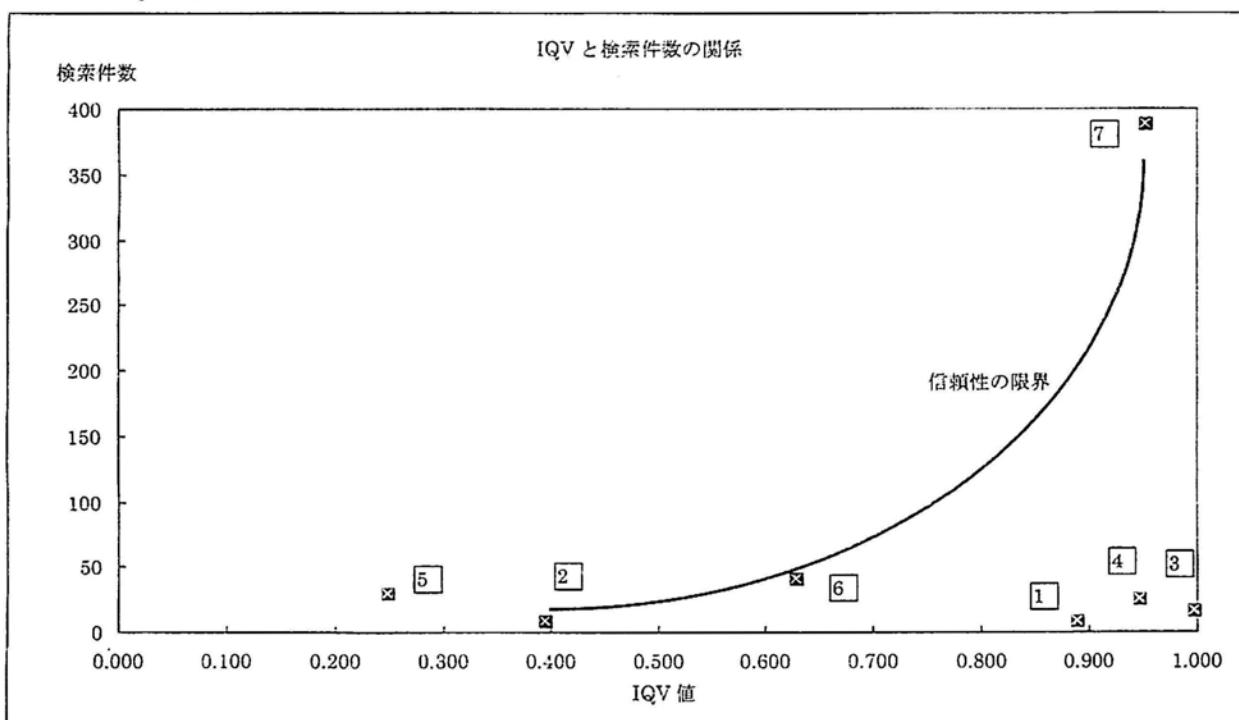
しかし、質的変動指数から分析結果に信頼性があるものは、検索総数が非常に多い「mais」と前記した IQV 値が低い「cependant」の二つしかないことになる。以下、その結果を表 12 に總める。

表 12、質的変動示数値からの口語的及び文語的表現ニュアンス分析の信頼性評価

	IQV 値	表現	検索合計	信頼性の評価
5	0.249	cependant	30	信頼性があると考えられる。
2	0.395	en dépit de	9	信頼性はあるが確信できない。
6	0.628	pourtant	41	信頼性は弱いと考えられる。
1	0.889	néanmoins	9	信頼性は無いと考えられる。
4	0.947	malgré (n)	26	信頼性は無いと考えられる。
7	0.953	mais...	389	信頼性はあると考えられる。
3	0.998	bien que	17	信頼性は無いと考えられる。

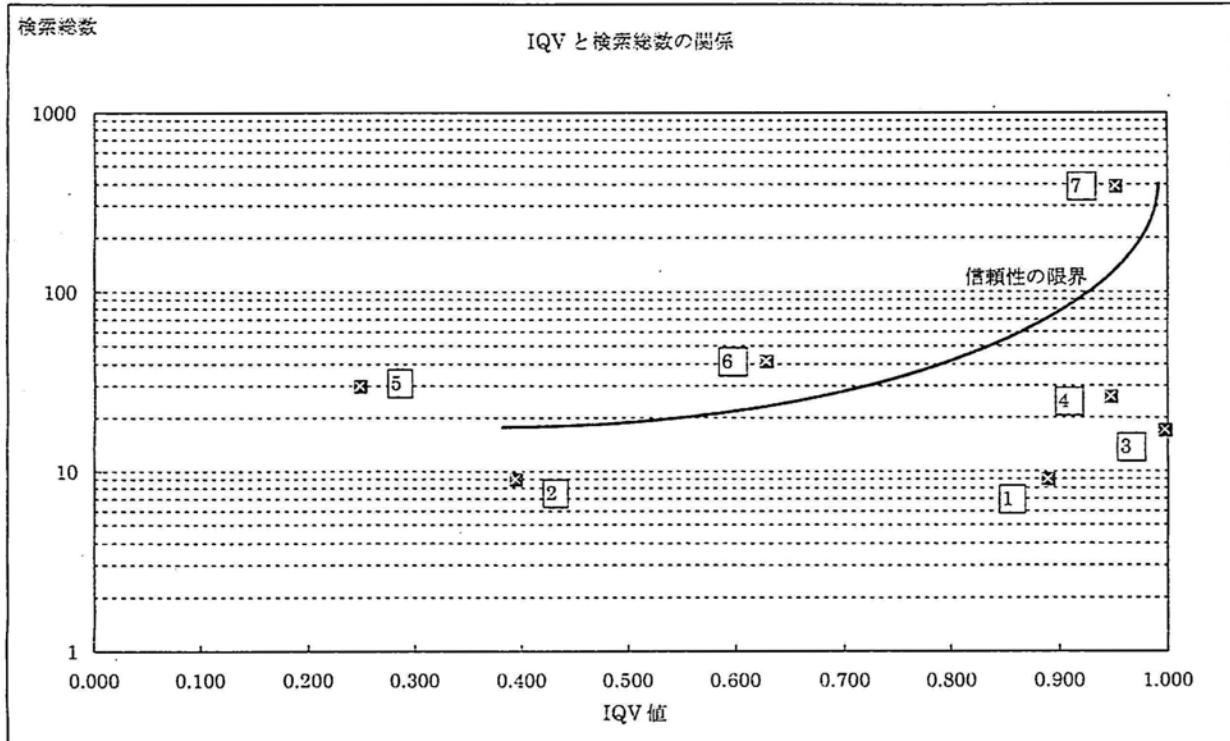
また、表11の結果を図1で整数座標を使いIQVと検索総数の関係を示す。また、この図1に表12に示した信頼性の評価を「信頼性の限界」関数として示す。

図1、IQVと検索総数の関係



しかし、図1では明確に20を最低限の検索合計の数と質的変動指數値との関係を観ることが出来ないため、図1の整数座標をY軸を対数表示を使った座標に変えて、質的変動指數値の再検討を行う。その結果を以下に示す。

図2、IQVと検索総数の関係



つまり、検索件数が10から50の近辺に集中しているため、対数表で示すことで、質的変動指數値と検索件数の関係が更に詳しく観ることができ、信頼性をより明確に判断する材料を示すことが出来る。

また、図1や図2で仮定した「信頼性の限界」関数は以下3式で示す関数的な性質を持つと言える。

但し、y軸は検索件数を示し x は質的変動示数値を示す。また、検索件数の最低値を20、質的変動示数の最低値を0.1とする。さらに、(x-0.1)の絶対値は0より大きく1より小さいとし、α、βを定数とする。

$$y = \alpha f(x) + \beta \quad (3)$$

但し、 $0.1 < x < 1$

この3式「信頼性の限界」関数から、与えられた検索件数 y から、口語的及び文語的表現ニュアンス分析の信頼性を充たすと評価出来る質的変動示数 x の範囲かその逆の評価できない質的変動示数 x の範囲、つまり「信頼性の限界」の外の範囲を次のように求めることができる。

$$y < \alpha f(x) + \beta \quad (4)$$

今、ここで示された「信頼性の限界」関数とそれから導きだされる「信頼性の限界」の外の範囲は直観的に図3で示したが、近似式で示すことが出来る。それに関しては数学的な操作をさらに続ける必要があるために、ここではこれ以上の議論を避ける。

また、次に議論しなければならないことは、この「信頼性の限界」関数が検索データベースの量に依存していることである。つまり、データベースが多くなるほど、検索件数が少なくても、質的変動示数値から導きだされる分布分析は評価できることになる。信頼性の限界」関数3式にデータベース量値 z を導入すると以下の5式が考えられる。

但し、xの絶対値は0より大きく1より小さいとし、定数 α、β はデータベースの量に依存していると仮定する。

検索データベースの量に依存している「信頼性の限界」関数は以下のように導かれる。

$$y = \alpha_n f(X, Z) + \beta_m \quad (5)$$

この式から

$Z \rightarrow \infty$ なら $\beta_m \rightarrow 0$ が成り立つため、検索データベースの量が非常に多い場合の「信頼性の限界」関数は以下のように示すことができる。

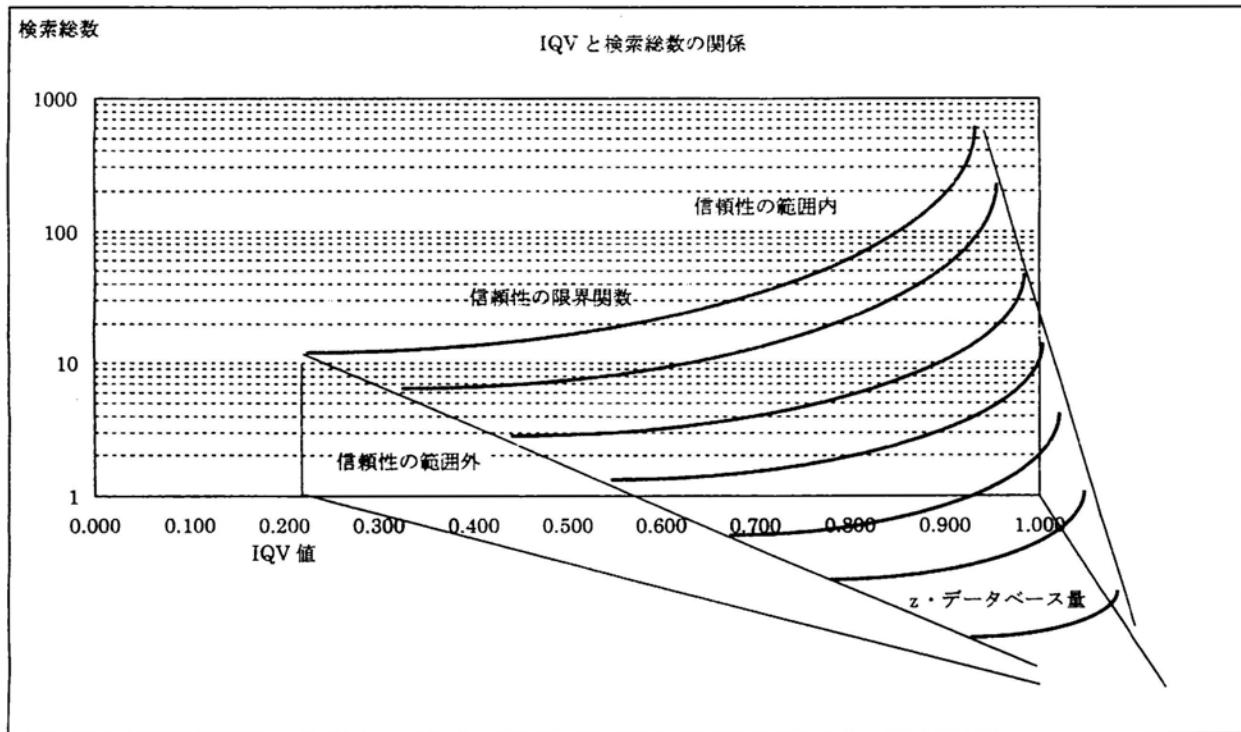
$Z \Rightarrow \infty$ なら $\beta_m \Rightarrow 0$ が成り立つため、検索データベースの量が非常に多い場合の「信頼性の限界」関数は以下のように示すことができる。また、その場合の質的変動示数値は 0 より大きく 1 より小さい場合の全ての値である。

$$y = \alpha_n f(X) \quad (6)$$

但し、 $0 < x < 1$

今、3式のデータベース量がある値を取る「信頼性の限界」関数から、データベース量が非常に多い値をとる 6 式の「信頼性の限界」関数までの変化の経過と、その場合の「信頼性の限界」範囲を以下の図 4 に示す。

図4、データベース量の変化に対する「信頼性の限界」範囲の変化モデル



意識分析による「讓歩を示す口語的ニュアンス及び文語的ニュアンスに関する表現」は、口語表現と文語表現のデータベースを基にした実態調査によってより正確に理解することが出来た。しかし、讓歩を示す口語的ニュアンス及び文語的ニュアンスに関する分布評価を判断する場合、データベースの量がその判断に関わってくるため、実態調査の分析のみでは、口文語ニュアンスの分布分析を正確に進めることができなかった。そこで、統計分析の方法によって実態調査で得られた資料を解釈することにした。質的変動指数値を用いて、その統計的分析の意味と解釈を行い、口文語的ニュアンスに関する分布の評価を行った。この分析で、データベース量と検索件数が質的変動指数値を使って分析することの信頼性と関係することが明らかになる。検索件数値、質的変動指数値とデータベース量の三つの要素から「信頼性の限界」関数を仮定し、その「信頼性の限界」関数から「信頼性の限界」の範囲内の値

と「信頼性の限界」の範囲外の値を導き出す。これらの作業は、現実の数値に対して「信頼性の限界」関数の近似式を作らなければ進まない。しかし、この作業はここでは省略した。何故なら、近似式の作成の労力に比べて、今課題になっている質的変動指數値を使って譲歩表現の口文語表現のニュアンスに関する片寄りの分布に関する評価の議論を進めることはそれほど重大な意味を持たないからである。質的変動指數値を使って口文語表現のニュアンスの評価を進めるためには、データベースの量や検索件数値に依存した質的変動示数値の信頼性が課題になるということをこの節での議論の結論として述べておく。

6、まとめ・問題提起

実態調査に用いた資料は口語的、文語的、文学的言語活動の全てに涉って行われることが前提となる。例えば、口語的言語活動には幾つもの異なる分野があり、その全てに涉って無作為にサンプリングされた事例が必要で、また文語的言語活動でも同じで、その科学的言語や文学的言語、社会学、人間科学、新聞記事、週刊誌等々の異なる分野のすべてに異なる用法の可能性があるため、それらのすべての分野から無作為にサンプリングされた事例が必要になる。文学的表現では、過去の文学、歴史学、哲学等の資料から同様に Random sampling された事例が必要になる。

現実のサンプルは、口語的表現として、1996年から1997年に掛けて France-Inter、France-Culture と RTBF (Radio Télévision Belge Francophone) から以下のテーマに放送された 27 の番組を選び、文語的表現として 1998 年と 1999 年のインターネットに記載された *Monde diplomatique* の、上記した口語的表現の為に選んだテーマと半分の数の同じテーマに関する論証的な記事を 27 選んだ。それらは、ラジオの放送と新聞記事であるため、全てのフランス語活動の分野から、取り出している訳ではない。従って、今後は分析の信頼性を上げるためにデータベースを加える必要がある。この作業は文語表現に関しては、現在、インターネットで資料入手することが出来る。しかし、口語的表現に関しては、ここで行ったように放送された番組を掘り起こす必要があるため、非常に大変な労力を必要としている。もし、テレビ番組やラジオ番組の資料がデジタル化されているなら、この作業も簡単になると思われる。

質的変動指數値からの言語分析は、現在のフランス語の用法と時代を離れており、また同時代であっても、カナダ・ケベックのフランス語とフランス本土のフランス語の比較をする場合に、有効な分析の手段となる。言い替えると、質的変動指數値からの統計分析によって、観測者の地理的、時代的制限を持って成立している実態調査の結果を、その統計的に処理された数値によって、時代を超えた、また地理的条件を超えた比較分析を可能にすると考えられる。

注釈と参考文献

¹ 1999年5月31日、日本での計量言語学研究の先端を担う計量国語学会の研究者・宮島達夫京都橘女子大学教授、元大阪大学教授、国立国語研究所名誉所員から、フランス語表現方法の計量的分析の可能性についてアドバイスを受けることができた。その助言を参考に、現在、研究している言語分析についての問題点を整理し、統計的分析の可能性やその研究上の戦略的意味に関して考察した。宮島達夫先生の説明(1999年5月30日)によるものである。

² 宮島達夫先生からのメールで以下の説明がさらに詳しくなされている。「分析の3段階について、わたしは、語彙にかぎらず、文法でも音声でも、言語一般について、このような段階を考えることができる、とおもっています。そして、その第3段階は、「統計分析」というよりも「実態調査」です。たまたま統計的手法をとった実態調査なら「統計」とよんでもいいのですが、いつも数が問題になるわけではありません。たとえば、ある単語の意味を考えるのに、規範は辞典に書いてあること、意識は個人が頭のなかで分析することですが、実態調査は使用例を集めて分析することです。そのさい、数が問題になることも、その必要がないこともあるでしょう。要は、(生成文法のように)研究者の意識にとどまるのではなく、現実の使用例に目をむけることだ、というのが、わ

たしの立ち場です。」宮島達夫、1999年7月8日

³ 林 大 監修 宮島達夫、野村雅昭、江川清、中野洋、真田信治、佐竹秀雄編、『図解日本語 グラフで見るこ
とばの姿 角川小辞典9』東京、角川書店、1982.2、p348.

⁴ MITSUISHI (Hiroyuki) et VAN DROM (Eddy) : "Sur les expressions logiques d'opposition dans la
langue française" in 『金蘭短期大学研究誌』 第28号、大阪、1997.12、pp153-182.

MITSUISHI (Hiroyuki) et VAN DROM (Eddy) : "Classification des principaux marqueurs exprimant
la causalité" in 『金蘭短期大学研究誌』 第30号、大阪、1999.12、

⁵ 口語体表現の例として選んだ1996年から1997年に掛けてFrance-Inter、France-CultureとRTBF (Radio
Télévision Belge Francophone)の27の番組の掘り起こし資料は、ワープロソフト、MS-Wordに書き込んだ。
そのメモリー量は約800Kで、A4用紙で印刷して154ページ数である。但し、1ページは、文字12ptで1行76
文字数、41行数で、約3,120語で書かれている。つまり、約480,000文字の資料である。

⁶ 文語的表現の例として選んだ1998年と1999年のインターネットに記載されたMonde diplomatiqueの記事の
資料は、同様にワープロソフトMS-Wordで、約800Kで書き込まれている。また、1ページは、文字12ptで1行
76文字数、41行数で、約3,120語で書かれている、A4用紙印刷枚数は156ページである。約487,000文字の資
料である。

⁷ ホームページ <http://www.sil.org/computing/conc> で提供されているEd. BEACH (Ed-Beach@sil.org) の
作成した英語検索ソフトである。この検索ソフトをフランス語に対応できるように改良し、今回のフランス
語表現方法の研究に活用した。